

Eureka XII

六年制通信 No.15 令和6年7月12日(金)号

反省、反省

皆さんは嫌いな言葉がありますか。世間では通用しているようだけど自分は絶対に使わない、そんな言葉があったら教えてください。若い君たちの感性が知りたい。私は、老人ですから当然のごとく、嫌いな言葉や苦手な表現がたくさんありすぎて困っています。そして最も嫌いかつ苦手なのは、およそ現代に流行している風潮ですな。これにはハリー・ポッターをハリポタなどと縮めて言うといったレベルの低いものも含まれますがね。バドミントンのペアなんかも二人の名前をくっつけて何とかペアとか言っていますよね。あれ、君たち、気持ち悪くないですか。

嫌いな言葉というと「…させていただく」の乱用が不愉快ですが、「…なと思います」もいい大人が使うと幼児みたいに聞こえて気分が悪くなります。スポーツ選手のインタビューで多く見られますが「頑張りたいなと思います」というやつです。この「な」の部分のを少し高く発音し、続く「と」の前にほんの少し時間を置きます。文字に起こすと「頑張りたいなっ、と思います」と言っている感じです。気色悪う。「頑張ります」でいいのにね。「を」は解説しないとわかりませんね。君たちは「お待たせをいたしました」をおかしいと思いますか。思いませんか。これ「を」はいらないですよ。ね。「お待たせいたしました」で十分です。「感動をしました」もそうです。必要ないところに「を」をつけるのが私は気になります。流行ってきているのかな。

嫌いなわけではないのですが苦手なのは数詞です。正確には数詞の読みです。例えば、三太、三佳、新三、三郎、信三郎、信三、三目小僧、これらを「三」のところだけ読むと順番に「さん」、「み」、「ざ」、「さぶ」、「ざぶ」、「ぞう」、「みつ」ですが、日本語を習う外国人になぜ違うのかと問われても答えようがないですわな。日本語には和語の「ひ、ふ、み、よ…」と漢語の「いち、に、さん、し…」があってややこしいのです。ね。「三度」を読むとき和語で始めれば「みたび」、漢語なら「さんど」とするのが普通でしょうが、本当にややこしくて私は苦手です。これ、四はもっと面倒に思います。たびたび登場していただいています、落語の桂米朝師匠ね。亡くなった桂ざこばさんのお師匠さんですが、この方は言葉に正確な方でした。米朝師の師匠である桂米團治の話を編集した『四世桂米團治寄席随筆』を出版された折、インタビューでまだ若い女性の聞き手でしたが「よんせいかつらよね…」と言い始めたらすぐ「しせい」と読みますと訂正されていました。私はこの時初めて「四」を意識しました。皆さん、次の語を発音してごらん。四度、四合瓶、二十四の瞳、四股、四時、四階、剣道四段。順番に「よたび or よんど」、「しごうびん」、「にじゅうしのひとみ」、「し

こ」、「よじ」、「よんかい」、「けんどうよだん」と私は発音しています。ではこれはどうでしょう。「君、いくつになったの」「十四です」。もちろん「じゅうし」です。では「君、いくつになったの」「十四歳です」はどうですか。「じゅうしさい」と「じゅうよんさい」のどちらですか。昭和の戦争が終わるころ、四年間という意味で使うと「四歳」は「しさい」と発音された記録がありますが、自分の年齢を「歳」をつけて言う習慣はまだ新しいのでしょうか。「十四歳」を「じゅうしさい」とは読めないな。

私の嫌いな風潮ですが、インフルエンサーと称される人たちが適当なことをネットで述べて、それに若者が影響を受けるというのですね。私も観てみましたが、例えば経歴から見ても学校関係とは無縁の方々が「学校なんか行かなくてもいい」みたいなことを言っていました。理由は社会に出てから必要のない教科がたくさんあるから、らしい。若者たちが一体どんな基準でこの人たちの言に信を置くのか理解できませんでした。素人の意見が飛び交って小学生の口喧嘩みたいな状況になっているだけでしたから。話し方も子どもっぽく下品ですから、あれは君たちには観せたくないね。それで、ネット社会の住人とはつき合えんわ、全く、とぶつぶつ言いながらいつもの朝涼の読書をしていたら『言志後録』の111条に「世の中には自分の考えと違う人もいれば、虫の好かない人もいる。だからといって、そういう人々を軽蔑し、排斥し、敵と見なすことは間違っています。そうではなく、寛大な心をもって、自分と異なる思想の人ともつき合っていくというのが、和です」と書いてありまして、大いに恥じ入ったわけです。自分と意見の違う人を遠ざけてはいけませんね。反省、反省。

今週のおすすめ

・汐見夏衛 『あの星が降る丘で、君とまた出会いたい。』（スターツ出版文庫）

『あの花が咲く丘で、また君とまた出会えたら。』の続編です。前作は以前このコーナーで紹介しました。映画にもなっているので是非観て下さいとも言いました。前作の、映画ではなくて小説の方ですが、特攻で散華した佐久間彰が加納百合の目の前に生まれ変わって現れる、同い年の宮原涼という転校生としてね。この生まれ変わりを強く示唆して終わってしまして、このラストに不満な読者がかなりいたと作者が語っています。わかる気もしますが、私はこれでいいと思いました。百合の物語が続いていかないとはやはり酷い気がしますから。涼は彰を知らないわけですが、百合の花の咲く丘にいる少女の夢をしきりに見るわけです。百合に会う前から。百合も涼に会った瞬間からこれは彰だと直感します。そんな二人は当然ひかれ合うわけですが、百合の愛した人は彰であって、彼はもういない。百合の心の中には彰が生きている。そのことを知ったうえで、百合を好きでいられるのか。苦しむ涼。涼のことを好きでいながら彰を想い続けることに苦しむ百合。さあ、どうなるのでしょうかね。

物語の途中、死を軽く扱うクラスメイトに強く反駁する百合の姿が描かれます。今生きているという奇跡を、彰の死を通して学んだ百合ですからね。作者はこの場面もどうしても書きたかったに違いないと私は思いました。

BGMは 杏里 の *Summer Candles* でした…。